

〔研究ノート〕

バロック期におけるメディチ家の宝物コレクション

松 本 典 昭

はじめに

17世紀以降、トスカーナ大公国の政治と経済は急速な下降線をたどっていくが、凋落する小国にとっては高い文化力こそが大国に伍していくために必要不可欠な外交手段だったので、文化には特別精力が傾注された。周辺諸国に尊敬されることが生き残りの唯一の方策だったのだ。

第4代トスカーナ大公はコジモ2世(在位：1609-21年)である。彼の跡を継いだ長男の第5代トスカーナ大公フェルディナンド2世(在位：1621-70年)の時代は、三十年戦争がヨーロッパを荒廃させ、ペストが襲来したが、暗い世相と反比例するように、大公も弟のマッティアス(1613-67年)とレオポルド枢機卿(1617-75年)もコレクションの増大に尽力した。

第6代トスカーナ大公コジモ3世(在位：1670-1723年)は歴代大公のうちでもっとも長命だった。コジモ3世と長男の大公子フェルディナンド(1663-1713年)の時代は、フィレンツェ・バロックが黄金の黄昏のように最後の輝きを放った時代である。

第7代トスカーナ大公ジャン・ガストーネ(在位：1723-37年)には継嗣がなかったため、1737年の死去によってメディチ家統治時代に幕が降ろされる。ジャン・ガストーネの姉アンナ・マリア・ルイーザが没し、メディチ家が断絶するのは1743年。死後作成された彼女の財産目録が重要な史料となる。

以上が本稿の考察範囲であるが、コレクションの運命を理解するために、メディチ家以後の大公についても触れておく必要がある。

メディチ家のあとにはロートリンゲン家のフ

ランツ・シュテファンが第8代トスカーナ大公(在位：1737-65年)に即位する。彼は即位前年にハプスブルク家のマリア・テレジアと結婚していた関係で、皇帝フランツ1世となる人物であり、フィレンツェではなくウィーンに居を定めた。2人の末娘が有名なフランス王妃マリ・アントワネットである。

大公フランツ・シュテファン=皇帝フランツ1世が死去すると、長男ヨーゼフ2世が皇帝に、次男ピエトロ・レオポルドが第9代トスカーナ大公(在位：1765-90年)に即位する。兄弟ともにフランス啓蒙思想の影響を受けた「啓蒙専制君主」である。大公ピエトロ・レオポルド時代に、ウフィツィ美術館の一般公開(1769年)からヨーロッパ最初の死刑と拷問の廃止(1786年)まで、レオポルド改革と総称される一連の啓蒙主義的諸改革が断行された。ピエトロ・レオポルドは1790年、兄ヨーゼフ2世の跡を継いでウィーンへ去り、皇帝レオポルト2世(在位：1790-92年)として即位する。

ピエトロ・レオポルドの次男フェルディナンド3世が第10代トスカーナ大公(在位：1790-99年, 1814-24年)に即位するが、フランス革命の激動に巻き込まれ、フランス軍侵攻により国外脱出を余儀なくされ、フィレンツェに帰還するのは、ナポレオンの没落をまたねばならなかった。次の第11代トスカーナ大公レオポルド2世(在位：1824-59年)の時代は、イタリア王国の統一によってトスカーナ大公国が閉幕することになる。

ロンドンの大英博物館の開館は1759年、パリのルーヴル美術館の開館は1793年。18世紀後半は合理精神につらぬかれた啓蒙主義の影響下で知の体系化がすすみ、さまざまな博物館や美

術館が整備されていく時代である。したがって本稿でとりあげる最後のメディチ家統治時代は啓蒙主義以前という括りになる。

I コジモ 2 世の肖像

19歳で父フェルディナンド1世の跡を継いだコジモ2世は、病弱なために国政をヴァロワ系の母クリスティーヌ・ド・ロレーヌとハプスブルク系の妃マリア・マッダレーナにゆだねざるをえなかった。嫁姑の仲は当然のことながらぎくしゃくしたが、私生活でのコジモ2世はやさしい夫で、12年間の結婚生活で8人の子をもうけた。政治経済より芸術を愛する趣味人で、短命を予感していたかのように、人生の歓楽を存分に満喫しようと決意したようである。

1612年にフランスからイタリアにやって来た偉大なメダル製作者ギョーム・デュプレ(1576-1643年)が、1613年からメディチ宮廷に仕えて鋭い線の美しいプロフィールのメダルを量産した。《コジモ2世の肖像のメダル》《フランチェスコ・ディ・フェルディナンド1世のメダル》《マリア・マッダレーナ・ダウストリアの肖像のメダル》(3点ともバルジェッロ国立博物館)などである。フランチェスコ(1594-1614年)というのは、コジモ2世の弟にあたるが、メダル製作の翌年に20歳の若さで早世した。

メディチ宮廷の造幣局で仕事をしたガスバロ・モーラ(1580-1640年)はコジモ2世のために数点の武具をつくった。《コジモ2世のための兜》《コジモ2世のための円形盾》(2点とも銀器博物館)は、実戦用ではなく祝典用であり、精妙で美しいグロテスク文様を鑿で削り出した傑作である。兜はモリオンと呼ばれるヘリが反り返った形で、頂上にはドラゴン、両脇の2つの銀製楕円形装飾には「名声」と「愛徳」の寓意像。盾の6つの銀製楕円形装飾には「信徳」「望徳」「愛徳」の3つの対神徳のうちの前2者、「節制」「剛毅」「賢明」「正義」という4つの枢要徳。つまり兜と盾のセットで「名声」と7つの諸徳を表している。また盾の周囲には黄道十二宮の

12の記号が配されている。

兜でもう1点紹介しておきたいのは、17世紀初頭から財産目録に記録されている《パレード用兜》(バルジェッロ国立博物館)である。製作者も製作年も不明であり、品質も上記の兜に比べるとかなり落ちるが、兜のうへの鷲(あるいはダンテの『神曲』に登場する金色のグリフィンかアリオストの『狂えるオルランド』に登場するグリフィンの子ヒッポグリフ)の頭と2枚の翼の派手なデザインが人目をひく効果抜群の変わり兜である。

コジモ2世がひいきにした画家フィリッポ・ナポレターノ(1589-1629年)は、アルノ川から採れる石灰石「アルベレーゼ」すなわち「風景石(ピエトラ・パエジーナ)」をカンヴァス代わりに使うのを好んだ。彼が石に描いた《聖アントニヌスの誘惑》(パラティーナ美術館)では、まがまがしい風景模様の左下に聖人がいる。病気が悪魔憑きと信じられていた時代、最終的に悪魔の誘惑をしりぞける聖アントニヌスは病人にとっては崇敬の対象だったのだ。

貴石象嵌の《コジモ2世の肖像》(銀器博物館)は、各種の貴石を組み合わせた魅力的なカメオである。さらに紅玉髓製のカメオ《コジモ2世とマリア・マッダレーナ・ダウストリアの肖像》(銀器博物館)も二重肖像のプロフィールの浮彫がみごとである。カメオの裏面は、金と多色エナメルで冠とメディチ家の紋章と渦巻文様。これらは大公直轄工房が達成した高度な技術を証明している。

コジモ2世時代も大公直轄工房の貴石象嵌細工いわゆる「フィレンツェ・モザイク」の輝かしい伝統はつづいた。なかにはプリンチピ礼拝堂用の宗教主題の作品もあって、たとえばキボリウムを飾る予定の8点連作の聖人像は、彫石師オラツィオ・モキの手によって1605年に4点が完成した。ところが《聖ペテロ》(銀器博物館)など、あとの4点は、オラツィオ・モキの模型に基づいて他の職人が製作を続行し、17世紀半ばまでに完成したが結局キボリウムには使用されなかった。色違いの貴石を組み合わせた

Oct. 2016

バロック期におけるメディチ家の宝物コレクション

立体の聖ペテロ像は、血管の浮き上がった右手に天国の鍵をもち悲愴な面持ちで天をあおいでいる。ミケランジェロの《ダヴィデ像》は高さ4メートル10センチの大作、こちらは高さ33.5センチの小品。だが《ダヴィデ像》に劣らないスケールを感じさせる小さな大作であり、これが無名の職人技かと感心させられる。

家具調度も数多くつくられ、非宗教主題のリゴッツィ風自然主義が主流となる。たとえばコジモ2世の弟ドン・ロレンツォ・デ・メディチ(1599-1648年)が所有していたと考えられる《ヴィッラ・ラ・ペトラリアの景観のあるキャビネット》(パラッツォ・ヴェッキオ)は、リゴッツィ風の果実や花や鳥の貴石象嵌パネルをまわりに配し、中央扉に、当初この家具が置かれていたヴィッラ・ラ・ペトラリアののどかな風景が描かれている。下絵を担当した、ロドヴィコ・チゴリ(1559-1613年)の弟子ジャック・ピリフェルト(1576-1644年)[大公冠を製作した同姓同名の金細工師とは別人]は、1615年には馬に乗ってメディチ家の別荘を訪ねまわっては、水彩でスケッチを描き、モザイク製作の下準備をしたことが知られている。

またフランス人銅版画家ジャック・カロ(1592-1635年)がフィレンツェに滞在(1612-21年)して時代の寵児になったのも、コジモ2世の治世と重なる。コジモ2世の他界と同時にカロがフィレンツェを去ったのも、2人が意気投合していたことを証左する。そのカロの版画集『せむしの人びと』(1616年刊)に基づいて貴石象嵌の《小人たちのテーブル天板》(ロサンジェルス、カウンティ美術館)がつくれるのは、メディチ家滅亡後のことである。テーブルの周囲の雲雷紋は、中国古来の農耕儀礼に関連する縁起のいい文様であるが、小人の内容とは無関係なので、意味の文脈から切り離されて形だけが借用された作例である。

コジモ2世が大公直轄工房に注文した最後の傑作《神に感謝を捧げるコジモ2世》(銀器博物館)には、稀少な貴石の数々が、目もくらむほどマニアックな技術を駆使して絢爛豪華に並ん

でいる。当初は、1610年におけるカルロ・ボッロメオの列聖記念品として、ミラノの聖カルロ・ボッロメオ聖堂の祭壇正面に設置される予定だった。祭壇の前で高揚してひざまずく盛装姿の大公にはルビーやダイヤモンドがちりばめられている。ミラノでも一目でトスカーナ大公とわかるように、背景にはもっともフィレンツェらしい景観すなわちサンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂の円蓋とジョットの鐘塔が選ばれている。平面の象嵌細工と立体の象嵌彫刻の両方の技法が本作のなかでは完璧に融合している。しかし工房の多くの職人(ヨナス・ファルク、ミケーレ・カストルッチ、グアルティエロ・チェッキら)の手で7年もの歳月を要したので、コジモ2世の生前には間に合わず、没後3年目の1624年によく完成した。完成品はミラノに発送されなかった。母より早く世を去った31歳のコジモ2世は、工芸水準の高さを示す貴石象嵌のうちに永遠の姿をとどめている。

もう1点、コジモ2世が歴史に名を残すのはガリレオ・ガリレイとの関係である。ガリレオはフェルディナンド1世、コジモ2世、フェルディナンド2世の三代大公に仕えた。自作の30倍の望遠鏡で発見した木星の4つの衛星を「メディチ星」と命名し、『星界の報告』(1610年)をコジモ2世に献呈するとともに、望遠鏡をプレゼントした。1609年末から1610年年頭にかけて集中的に製作した100本以上(レンズの手研磨の困難を考えれば驚異的な数)の望遠鏡のうち、2本だけがフィレンツェのガリレオ博物館に現存している。

ガリレオがフィレンツェで出版した『天文対話』(1632年)は、大公フェルディナンド2世に献呈された。コペルニクスの地動説を支持したことで、翌年、ローマの宗教裁判で有罪判決が下されたが、23歳の若い大公フェルディナンド2世は恩師の擁護に尽力を惜しまなかった。

フィレンツェ近郊アルチエトリの自宅で軟禁生活を送ったガリレオ・ガリレイが死去したのは、1642年1月8日。それから100年近く経っ

た1737年3月12日、ジャン・ガストーネは教皇の意向に背いて、遺体をサンタ・クローチェ聖堂（ミケランジェロらの墓があるフィレンツェのパンテオン）の内部に移葬した。夕闇のなかで切り取られた右手の指3本と歯1本が現在ガリレオ博物館に展示されているのは、さながら現代の聖遺物といった趣である。

マリア・マッダレーナは1620年代に多くの聖遺物容器を発注した。《聖十字架の聖遺物容器》（銀器博物館）などは、まさに豪華なバロック様式の典型である。頂点には救世主キリスト。浮彫のケルビム（智天使）、ブット、果実、怪人面、女性寓意像、そして多彩な貴石が隙間なく埋め尽くしている。もとはピッティ宮殿のマリア・マッダレーナの個人礼拝堂に置かれていた。

マリア・マッダレーナの宝物できわだっているのは、琥珀と象牙製の《小祭壇》（銀器博物館）である。琥珀はバルト海沿岸で産出する天然樹脂（数百年から数億年前の松や杉などの樹脂）の化石であり、鉱物ではないが、鉱物に匹敵する硬度と美しさと光沢のために宝石と考えられた。黄色、茶褐色、赤褐色がある。贅沢な素材と大胆な造形の宗教作品である。

II フェルディナンド2世のプライヴェート・コレクション

コジモ2世の治世はわずか12年間で終わったが、その長男フェルディナンド2世の治世は49年におよぶ長期安定政権となった。即位時は11歳だったため、祖母クリスティーヌ・ド・ロレーヌ（1637年没）と母マリア・マッダレーナ（1631年没）が摂政の地位にあったが、18歳で成人した1628年からは政務をとった。

16世紀のコジモ1世がパラッツォ・ヴェッキオを改造してマニエリスム画家ヴァザーリに装飾させたように、17世紀のフェルディナンド2世はピッティ宮殿を拡張してバロック画家ピエトロ・ダ・コルトーナに装飾させた。以後、ピッティ宮殿が生活の場としても宝物庫として

も重要性の比重を増してくる。

コジモ2世の妹クラウディア（1604-48年）は1622年、オーストリア大公レオポルト5世に嫁ぎ、フェルディナンド2世の妹アンナ（1616-76年）は1646年、そのオーストリア大公夫妻の息子フェルディナント・カールに嫁いだ。このような幾重もの政略結婚を通してメディチ家とハプスブルク家は緊密な関係を築き上げていった。

1628年にフェルディナンド2世がインスブルックにオーストリア大公レオポルト5世を訪問した際、オーストリア大公は6000ターレルで入手したばかりの豪華な贈り物をした。黒檀製の《アレマーニャのキャビネット》（銀器博物館）である。黒檀は南アジアで採れるカキノキ科の常緑高木で、漆黒の光沢と緻密で重厚な堅固さに特徴がある高価な銘木である。同じ黒檀製のフランチェスコ1世のキャビネット、フェルディナンド1世のキャビネットと並ぶフィレンツェ3大キャビネットのひとつであるが、うち現存しているのはこのキャビネット1点だけである。しかも前二者がフィレンツェ製であるのに対して、わざわざ「アレマーニャ」とロマンティックな響きのあるドイツの雅名を与えられたところにも、この作品のもつ特殊性がうかがえる。

贅を凝らしたこのキャビネットを設計したのは、アウクスブルクの美術商フィリップ・ハインホーファー（1578-1647年）である。彼はパドヴァ大学卒業後に美術商になったが、フランス王アンリ4世の宮廷などヨーロッパ各国の宮廷に赴いた外交官でもあり、そのネットワークを商売と蒐集に活かした博識の実業家である。ウルリヒ・バウムガルテン作と考えられる彫刻はすべて黒檀製であり、聖書の82場面とキリスト伝の20場面を表したカラー・パネルは、貴石の上に直接絵の具で描かれている。一方、キャビネット内部に隠されているボックスは、円柱が回転することで扉が開閉する仕掛けになっているが、その扉の装飾は貴石象嵌細工である。モチーフは小鳥や風景であり、「フィレンツェ・

Oct. 2016

バロック期におけるメディチ家の宝物コレクション

モザイク」を(やや粗雑に)模倣した「フィレンツェ風モザイク」が普及していたことがわかる。だがドイツの職人技の粋を結集した、このキャビネットのもっとも驚くべき点は、機械仕掛けのオルガンを内蔵してアウクスブルク大聖堂のオルガニスト兼作曲家のクリスティアン・エアバッハの宗教音楽を自動演奏したことである。キャビネットが設置されたウフィツィの「トリブーナ」は、天上的な宗教音楽が響き渡ること、で、神聖な空気に満たされたはずである。

フェルディナンド2世の趣味は国際的である。マッテオ・ニジェッティがデザインし大公直轄工房が1642年から1646年にかけてつくった黒檀製の《フェルディナンド2世のキャビネット》(ウフィツィ美術館)のように、多くの家具類はドイツ様式を採用していることは間違いない。ただし、このキャビネットには、2人のプットのあいだにメディチ家の紋章と大公冠、2本ずつの円柱に囲まれた中央の壁龕、そして貴石象嵌細工の風景や花々がふんだんに使用されているところにフィレンツェらしさがうかがえる。これが現在ウフィツィ美術館の「トリブーナ」に置かれている唯一のキャビネットである。

大公直轄工房は、あいかわらず活発な活動をつづけていた。「自然主義」の家具調度の下絵画家として活躍したのが、フランチェスコ1世、フェルディナンド1世、コジモ2世、フェルディナンド2世の四代に仕えたヴェローナ出身の画家ヤコポ・リゴッツィである。リゴッツィが関わった作品群の頂点をなす最高傑作が、現在ウフィツィ美術館の「トリブーナ」の中央に置かれている《フェルディナンド2世の結婚のための八角形テーブル》(ウフィツィ美術館)である。リゴッツィらしい「花散らし」の超絶技巧を用いた驚異的作品である。リゴッツィ自身は、1637年のフェルディナンド2世とヴィットリア・デッラ・ローヴェレの結婚式も、1649年のテーブルの完成も目にすることなく、1627年にフィレンツェで没し、3月26日にサン・マルコ聖堂に埋葬された。

フェルディナンド2世が自分の好みに増築したピッティ宮殿の「夏の居住区」と呼ばれる南向きの明るい私室で(とくに夏季を)過ごすのを好んだことはいうまでもないが、そこに蒐集した私的な愉悦のためのコレクションが現在同じ場所つまり銀器博物館に展示されている。高さ78センチの《琥珀製噴水器》(銀器博物館)などは、尖端でプットたちが戯れるこまかい細工がほどこされ、ワインが吹き出していた。夏の夕暮れにボーボリ庭園で催される夜宴や芝居やオペラをワイングラス片手に鑑賞するのは、なんという贅沢だろう。

フェルディナンド2世が所有した最高級品の1点は、ザクセン選帝侯から贈られた《蓋付き高坏》(銀器博物館)である。蓋の上の金とエナメル製の兵士像は右手に槍をもっているが、財産目録によれば、本来は左手にザクセン選帝侯の紋章のついた盾をもっていた。ちなみに、このときいっしょに贈られた品には、中国製の皿、宝石箱、黒檀製の小型キャビネット、そして「薬用の」象牙などがあつた。

この時期の魅力的な彫玉を3点紹介しておきたい。紫水晶製インタリオ《ライオンに乗るエロス》(国立考古学博物館)は、紫と青と緑が解け合った透明感のある色合いが美しい。石の彫りは2世紀にさかのぼり、ライオンの顔がなぜか人面である。12個のダイヤモンドと白と黒のエナメルのほどこされた金のフレームは、17世紀前半のパリの作風である。

玉髄製カメオ《ヴィーナス》(銀器博物館)は、白とピンクの色の変化を巧みに利用した作品である。中央にはくつろいで横たわるヴィーナス。まわりでは2人のアモリーノが織物をささげもち、好色なサテュロスが裸身の女神を覗き込んでいる。16世紀後半に仕事をした職人アレッサンドロ・マスナゴに帰される作品であるが、記録に確実に現れるのは17世紀後半である。白に浮かぶ淡いピンクがなんともいえない色香をただよわせている。

逆に確固たる意志の強さを感じさせるのが、カメオ《ムーア人女性の胸像》(銀器博物館)で

ある。暗い瑪瑙を背景に黒人女性の横顔が浮き彫りにされている。頭にかぶるターバンと胸がバロック真珠、衣服と装身具が金とエナメルと1粒のダイヤモンド。いつメディチ・コレクションに入ったか記録がないが、その独創性と奇抜さはメディチ家所有のカメオのなかでも出色である。

フェルディナンド2世と結婚した従妹ヴィットリア・デッラ・ローヴェレもメディチ・コレクションの増加に貢献した。ヴィットリアはウルビーノ公爵家の唯一の遺産相続人だったために、嫁資の一部として多くの名画をフィレンツェに持参した。現在、ウフィツィ美術館にあるティツィアーノ作《ウルビーノのヴィーナス》に「ウルビーノ」という題名がついているのもそのためである。

《トルコ石製仮面》(銀器博物館)は、目に2個のダイヤモンドが嵌め込まれた真っ青な仮面である。かつて仮面自体はメキシコ製と考えられてきたが、現在では17世紀にメキシコ製品を模倣したイミテーション説が有力である。櫛の2本の枝が仮面を取り囲んでいるが、櫛はイタリア語でローヴェレということから、ヴィットリア・デッラ・ローヴェレのコレクションだったと考えられる。作者も来歴も所有も不確かではあるが、インパクトがあってユニークなオブジェであることは確かである。

Ⅲ フェルディナンド2世時代の象牙彫刻

17世紀になると象牙はブロンズと並ぶ彫刻の重要な素材となった。フェルディナンド2世の母 MARIA・マッダレーナが所有していたのは、《うずくまるスペイン犬》(銀器博物館)である。動物好きのコジモ2世と MARIA・マッダレーナ夫妻は、ボッジョ・インペリアーレの別荘に大きな犬小屋をおのおの所有し、その1棟は大公妃みずから装飾を手がけたほどである。この象牙の犬のモデルは、MARIA・マッダレーナが夫から贈られた小さな愛玩犬スペイン犬で

ある。

フェルディナンド2世が所有していたのは《クレオパトラ》(銀器博物館)。エジプト女王クレオパトラが毒蛇に胸を噛ませて自殺するという、主題も作風も古典的な風格のある作品である。

ところが《檻の中の馬》(銀器博物館)となると、驚異的な超絶技巧が駆使されている。象牙が硬度の低い素材といっても、どうやってつくられるのか想像もつかない。製作者のフィリッポ・プランツォーネはシチリア生まれだが、ジェノヴァで仕事をし、1624年にこの作品をフェルディナンド2世に献呈した。

象牙彫刻を語るうえで欠かせない歴史的出来事が、フェルディナンド2世の治世前半と重なる三十年戦争である。ドイツを主戦場としながらもヨーロッパ諸国を巻き込んだ国際的な宗教戦争で、大公フェルディナンド2世も伯父の皇帝フェルディナント2世の求めに応じてトスカナ軍を派遣した。1632年、フェルディナンド2世の弟フランチェスコ(1614-34年)は18歳で参戦したが、2年後にペストにかかってハンガリーで斃死した。その1歳上のマッティアス(1596-1633年)は弟より幸運だった。1632年9月28日、バイエルン地方のコーブルクを攻略した際に、高さ30センチから50センチほどの「象牙の塔」32点を戦利品として獲得した。それらの象牙製品は、ザクセン=コーブルク公ヨハン・カジミール(1596-1633年)のために、マルクス・ハイデンと弟子のヨハン・アイゼンベルクが、1618年から1631年にかけて製作したものだった。何点かはザクセン=コーブルク公自身も製作に加わっていたので、略奪には切齒扼腕したはずである。フィレンツェに送られた戦利品は1633年4月11日の文書に記録された。

マッティアスがコーブルクで獲得した象牙製品32点中27点が現存している。象牙の塔は「壺」とか「カップ」と呼ばれているので何かを入れる容器だったはずだが、とても実用に耐えうとは思えない繊細さである。事実、これらは至宝だけを集めたウフィツィの「トリブーナ」

Oct. 2016

バロック期におけるメディチ家の宝物コレクション

に展示されていた。イマジネーションの極みと手工芸の極みをアクロバティックに結合させた摩訶不思議な形状である。ここに紹介する5点はすべて銀器博物館に並んでいる。

《象牙製カップ(1)》にはライオンの紋章と三日月が付いている。崩れそうなコインタワーに載った《象牙製カップ(2)》には鎖がたれさがっている。《象牙製カップ(3)》では人が大きな球体を頭に載せている。《象牙製カップ(4)》のてっぺんには植物が付いている。螺旋状のコインタワーに載った《象牙製カップ(5)》のてっぺんでは鹿と犬が飛び跳ねている。解説不能。頭は苦しめるが、目は楽しませる。おもしろいと感じれば、眼福により寿命がのびるというものだ。

三十年戦争中の軍人マッティアスは1639年のネルトリンゲンの戦いでも武名をあげた。プロテスタント側の敗将ベルンハルト・フォン・ザクセン＝ワイマールの軍服を奪い、「トリブーナ」のそばの「武器の間」に展示した。マッティアスの肖像画に軍服姿が多いのは、こうした武勲を誇っているのである。

Ⅳ フェルディナンド2世の弟レオポルド枢機卿

兄弟のなかでマッティアスと別の道を歩んだのが、枢機卿だったジャンカルロ(1611-63年)の死後、1667年に50歳で枢機卿になった末弟レオポルドである。レオポルド枢機卿は生涯に約700点の絵画、1万点以上の素描、130点の自画像、約700点の細密肖像画を蒐集して、今日のウフィツィ美術館やピッティ美術館の基礎を形成した稀代の美術品蒐集家だった。そればかりでなく、工芸品に対する鑑識眼もすぐれており、生涯に蒐集した彫玉の数はじつに911点におよんだ。

当時、ローマにおける古代品取引市場は活況を呈していた。玉髓製カメオ《ティベリウスとリウィアの肖像》(考古学博物館)をめぐって、レオポルド枢機卿はデ・マッシミ枢機卿と激

しく競り合った。このカメオの発見者パオロ・ファルコニエーリは、レオポルド枢機卿御用達の古物商オッタヴィオ・ファルコニエーリの従兄弟である。オッタヴィオ・ファルコニエーリはレオポルド枢機卿にカメオの情報を伝えて次のように購入を勧めた。「もちろん、できるだけ安く手に入れるように努力しなければなりません。何がなんでも手に入れる必要があります。なぜなら、これほど大きくて保存状態のいい品は、いまではもう見つかりませんから。」こうしてレオポルド枢機卿は、メディチ・コレクションのなかでも極上の逸品をパオロ・ファルコニエーリから130スクードで購入することに成功したのである。

1669年から1671年にかけて、やはりオッタヴィオ・ファルコニエーリの助言で、レオポルド枢機卿はレオナルド・アゴスティーニ旧蔵の彫玉を相当数購入した。レオナルド・アゴスティーニ(1594-1676年)は17世紀ローマ文化の中心にいた古代品蒐集家で、1657年には『挿絵入り古代彫玉』を出版し、複数の蒐集家の彫玉214点を厳選して解説している。そのなかには自身の所蔵品も含まれているが、《アポロン》(銀器博物館)、《ヘルマフロディトゥス》(考古学博物館)、《「マシニッサ」の頭部》(考古学博物館)などがレオポルド枢機卿のコレクションに移った。「マシニッサ」は、ポエニ戦争でスキピオ・アフリカヌスと結んでハンニバルに勝利したヌミディア王の名前。非ヨーロッパ系の鬚をもつ精悍な頭部像の通称である。紫水晶は色が濃いほど高品質で稀少価値が高いが、濃い紫の高貴さと戦士の高貴さがみごとに一致した作品である。

またレオポルド枢機卿は1673年、彫玉の蒐集家でもある大修道院長アンドレア・アンドレーニを通じて、ドイツで製作された同時代のカメオ28点をまとめて購入した。それらは現在、ほぼすべてが銀器博物館にある。

象牙彫刻の分野もめざましい。レオポルド枢機卿はローマでバルタザール・ペルモーザー(1651-1732年)やバルタザール・シュトッケ

マーのようなドイツ人象牙彫刻家を雇った。後者には《ダヴィデとゴリアテ》(銀器博物館)、《アポロン》(銀器博物館)、そしてピエトロ・ダ・コルトーナの作品に基づく《ヘラクレスとヒュドラ》(銀器博物館)などを発注した。神話の英雄ヘラクレスが退治するヒュドラは、水蛇ながら胴体が犬で、頭が多数ある怪物。頭は切っても、切っても、また生えてくるという不気味な執念深さである。高さ27.6センチという小さな空間のなかで激しいバトルが繰り広げられている。

逆に静寂感すらただよわせるのは、同じパトリオンが同じ製作者に発注した古典的な《正義と平和》(銀器博物館)である。「正義」の女性寓意像が手にする権標は、古代ローマ時代にさかのぼる権力の象徴であり、ラテン語で「ファスケス」、イタリア語で「ファッシ」という。「ファッシ」が「団結」を意味してファシズムの語源となる20世紀の事情など、当時はもちろん知るよしもない。

ミケランジェロの大理石作品をコピーした象牙彫刻《曙》と《黄昏》(銀器博物館)も、レオポルド枢機卿のコレクションにあったものである。メディチ礼拝堂にあるオリジナルの大理石作品と寸分違わぬみごとな出来映えであるが、驚くべきは模倣の精確さではなく、高さ8センチ、横幅21センチという小ささである。

金色の植物文様が描かれてやや風合いの異なるのが《象牙製多面体》(銀器博物館)。大小いくつもの多面体が入れ子構造になっている。どうしてこのような複雑な造形が可能なのか、まったく理解しがたい。

理解しがたい神業といえば、《深淵に身を投じるマルクス・クルティウス》(銀器博物館)だ。「フリエ(復讐の女神)の匠」と通称されるドイツ人の職人が1640年代につくった象牙彫刻である。マルクス・クルティウスというのは、前362年、ローマの底なし沼が都市全体を丸呑みしそうになったとき、神託にしたがってわが身を生贄にささげて阻止した伝説上のローマ軍人である。フォロ・ロマーノにあるクルティウス

池の名前の由来となった。虚空に勇躍する馬上の騎士の姿に、崇高な自己犠牲の精神を造形化した驚異的な作品である。

V コジモ3世と大公子フェルディナンド時代の黄金の黄昏

大公フェルディナンド2世の49年間の治世のあと、1670年に28歳の長男コジモ3世が即位したが、彼の治世は父よりも長い53年間におよんだ。2人で1世紀を超える。金製メダル《コジモ3世の肖像》(バルジェッロ国立博物館)は、1670年の即位を記念してつくられたもので、意欲満々、覇氣にあふれている。

即位前の1661年にフランス王ルイ14世の従妹マルグリット・ルイーゼ・ドルレアン(1645-1721年)と結婚した。新郎18歳、新婦16歳。縁組みの背後には、教皇位をねらうマザラン枢機卿の画策があった。花嫁がバリの宮廷から持参した多くの彫玉のなかでも特別重要なのが、1400年頃に製作された大型の玉髄製カメオ《天使に支えられたキリスト(天使のピエタ)》(銀器博物館)である。

同じ「花の都」と謳われても、17世紀のバリとフィレンツェは盛花と残花ほどの違いがある、と花嫁の目に映ったとしても不思議はない。華やかなバリが忘れられず、結婚当初から望郷の念はつのるいっぽう。フェルディナンド、アンナ・マリア・ルイーザ、ジャン・ガストーネと3人の子をもうけながら、結局、1675年、13年間の不幸な結婚生活にピリオドをうって単身フランスに帰国することになる。鬱々としたコジモ3世のほうは、気晴らしにドイツ、ポルトガル、スペイン、イングランド、オランダ、フランス(国王ルイ14世自身がバレエを披露して歓迎)などを漫遊し、同行の画家ピエル・マリア・バルディにはお気に入りのオランダの都市の景観画を描かせた。

フランスやオランダに比べるとトスカーナ大公国の政治と経済の凋落は目をおおうばかりだったが、叔父レオポルド枢機卿の影響をうけ

Oct. 2016

バロック期におけるメディチ家の宝物コレクション

た大公コジモ3世と大公子フェルディナンドは金に糸目をつけずに文化を保護したので、フィレンツェ・バロックは黄金の黄昏のように豊麗な輝きを放って大公国の国際的名声を高めるのに寄与した。事実、ルイ14世の財務総監コルベールがフランスにゴブラン織工房を創設したとき、大公直轄工房のフェルディナンド・ミリオリーニら数名の職人を引き抜かざるをえなかったし、大公直轄工房が生産する貴石象嵌細工は依然としてルイ14世の宮廷でも垂涎の的でありつづけた。

大公直轄工房には国際色豊かな職人が結集していた。オランダ出身の木工象嵌の名匠ヴィットリオ・クロステンは、1663年から1704年にかけてメディチ宮廷で活躍し、植物装飾のある額縁を多数製作した。

コジモ3世が栽培していた植物を描いた画家バルトロメオ・ビンビ(1648-1729年)の連作の1点《2本のカーネーション》(銀器博物館)においても、クロステン作の額縁では植物の生命感が躍動している。地中海沿岸が原産のカーネーションは、17世紀には300種以上に品種が増えた人気の花だった。

宮廷画家バルトロメオ・ビンビはヤコポ・リゴッツィの系譜をひく動植物画家であり、トピアの別荘やカステッロの別荘の庭園あるいはボーポリ庭園で栽培された珍しい植物や果樹を多数描いた。《サクランボ》(フィレンツェ郊外ポッジョ・ア・カイアーノ、メディチ家の別荘)にはじつに34種ものサクランボが品種名つきで描かれ、《ダイダイ、シトロン、レモン》(フィレンツェ郊外ポッジョ・ア・カイアーノ、メディチ家の別荘)にもやはり34種の柑橘類が品種名つきで描かれている。画家は自然の豊饒な多様性をまるで植物園をめぐるか植物図鑑のページをめくるように開陳することで、コジモ3世の博物学的好奇心を満足させたのだ。

音楽愛好家の大公子フェルディナンドの蒐集癖を満足させるためには、《楽器》(ピッティ宮殿)を描いている。神の創造の驚異は《双頭の子牛》(ピッティ宮殿)にきわまる。この畸形の子

牛は1719年5月にフィリカイアの農場で生まれたが、ひとつの口で乳を飲んでも別の口で吐き出してしまうので、2日と生きることはできなかった。

ヴィットリオ・クロステンが象嵌職人ゲラールト・ヴァルダーおよび象嵌職人レオナルド・ヴァン・デル・ヴィンネ(レオナルト・ファン・デア・フィネ)と組んで共同製作した作品が、《フェルディナンド2世の肖像》(貴石細工研究所博物館)である。作品の主役は水晶製の肖像よりもむしろクロステンが担当した周囲の額縁である。硬いツゲの木を用いた象嵌細工は、故人のモットーを示す装飾文字と薔薇の花と葉を組み合わせて3D効果をうみだす超絶技巧が駆使されている。

フランドル出身のレオナルド・ヴァン・デル・ヴィンネは、17世紀前半のパリでフランボワイアン様式のバロック象嵌を生み出したが、1659年にフィレンツェにやって来るとフィレンツェ伝統のリゴッツィ風植物文様を取り入れた。大公子フェルディナンドと同年に没するまでのあいだ、ヴィンネは大公子フェルディナンドのために数え切れないほどの作品を残したが、1660年代後半の幼年期の姿をとどめる《大公子フェルディナンドの肖像》(貴石細工研究所博物館)は、木に象牙や鼈甲を象嵌した作品である。異なる素材の象嵌にヴィンネの真骨頂がうかがえる。

ヴィンネは国内向けと国外向けにたくさんの家具をつくり、1677年には大公直轄工房の首席家具職人の地位についた。彼が製作した家具の最高傑作が《象牙と真珠層と各種木材を象嵌したキャビネット》(貴石細工研究所博物館)である。黒人が頭で支える黒檀とクルミ材製のキャビネットは、色彩の派手さはないが、象牙と真珠層と一部彩色された各種木材が複雑に組み合わせられた植物模様が美しい、高度に洗練された作品である。中央が凹んだ形になっていて、内部に小さなケースがたくさん隠されている。頂上の渦形装飾のあいだに鍍金ブロンズ製の女神パラス(アテナ)像が付いているが、上部の手

すりに台座の痕跡が残っているので、本来はオリュンポス12神像が鎮座していたはずである。

コジモ3世も大公子フェルディナンドも象牙彫刻を愛したが、この分野は伝統的にドイツ人職人が独占してきた。大公子フェルディナンドなどは、1675年にフィレンツェにやって来たバイエルン出身の象牙職人フィリップ・ゼンガーに旋盤で削る手ほどきを受けて、みずから《象牙製の壺》(銀器博物館)を製作したほどの熱の入れようだった。内部に署名と年記があるので、15歳時の作品だとわかる。

メディチ宮廷できわだってユニークで、まわりを明るくする楽しい存在が、この美貌の大公子フェルディナンドである。文学や美術を愛し、とりわけ音楽については作曲からチェンバロやヴァイオリンの演奏、歌唱や舞台演出までこなす多才なディレッタントだった。生きる歓びを旋律にのせたヘンデル、ヴィヴァルディ、アレッシンドロ・スカラッチェ、ドメニコ・スカラッチェのパトロンとしても知られる。ヴェネツィアとカーニヴァルとカストラートが好きとくれば、おおよそその人となりは想像できよう。

象牙職人フィリップ・ゼンガーは1712年、コジモ3世の宮廷からロシア皇帝ピョートル1世(在位:1682-1725年)の宮廷に派遣され(返礼にピョートル1世はコジモ3世に自作の羅針盤を贈った)、1723年にペテルブルクで客死することになるが、フィレンツェ滞在中の作品がフィレンツェに3点残っている。2点は象牙製容器、1点は《象牙製の2つのメダル》(銀器博物館)である。一方のメダルにはコジモ3世の肖像、もう一方のメダルには大公冠とモノグラムの浮彫がほどこされているが、信じられないのは、2つのメダルが象牙製の鎖でつながっていることである。

ドイツのカンマー出身の彫刻家バルタザール・ペルモザーは、ブロンズ、大理石、象牙などあらゆる素材で宗教作品も世俗作品も手がけた万能人である。1676年から1689年にかけてつくった数々の象牙彫刻のなかに、1689年に

大公子フェルディナンドがヴィオランテ・ディ・バヴィエーラ(フランス王太子妃の妹)と結婚した記念につくらせた《ヴィオランテ・ディ・バヴィエーラの肖像》(銀器博物館)がある。ミュンヘンから嫁いだ16歳の花嫁は、うつむきかげんで、いくぶん神経質そうにみえる。

前述のオランダ人ヴィットリオ・クロステンがアダモ・ジェスターと組んで、フィレンツェ人ジョヴァン・バッティスタ・フォッジーニのデザインに基づいてつくった傑作が、1704年に完成した《黒檀製キャビネット》(ピッティ宮殿のアッパルタメンティ・レアーリ)である。ピロードのような光沢のある黒檀を背景に白い象牙の細かいグロテスク文様と植物文様が躍動的に象嵌してある。

1698年の記録によれば、大公子フェルディナンドの部屋には、一部に暗褐色に輝く貴重な鼈甲を使用した家具が数点あった。そのうちの1点は、雪花石膏製のテーブル天板が失われて、現在は鼈甲を使用した脚部の《トリトン》(ピッティ宮殿のアッパルタメンティ・レアーリ)だけが残っている。ジョヴァン・バッティスタ・フォッジーニ作の3人のトリトンが真珠の入った大きな貝殻を手にはしているが、その真珠がちょうどメディチ家の紋章の6つ玉のようにみえる趣向が凝らされている。

このように17世紀には異なる素材を組み合わせることが流行したが、1689年の年記のある《容器》(ピッティ宮殿のアッパルタメンティ・レアーリ)もフランドル産の黒大理石と銀と鍍金ブロンズが組み合わせられている。それによって、黒い容器からまるで黄金のプットがむくむくと湧き出してくるような印象を与える。ブロンズ彫像の作者はマッシミリアーノ・ソルダーニ・ベンツィ(1656-1740年)で、フォッジーニと同様、フィレンツェ・バロック彫刻の第一人者である。この容器は、大公子フェルディナンドが所有していた4点セットの1点である。

ジョヴァン・バッティスタ・フォッジーニとバルタザール・ペルモザーが共同製作したと考えられる《時計》(個人蔵)が残っている。製

Oct. 2016

バロック期におけるメディチ家の宝物コレクション

作時期は、ベルモザーがフィレンツェの宮廷からドレスデンの宮廷に移る1689年より以前である。ボディは黒檀と黒く塗った洋梨の木。最下層はコルシカ産の碧玉と黒大理石に象嵌された貴石の花模様。中央の文字盤にも同じ花模様が繰り返される。両脇の渦形装飾はバルガ産の碧玉で飾られている。上に立つ鍍金ブロンズ像は鎌を片手に天翔ける有翼のクロノス神いわゆる「時の翁」である。「イル・テンポ・ヴォラ（光陰矢の如し）」を意味している。

大公子フェルディナンドの芸術的感性の鋭さをよく示す作品が彼の部屋に飾られていた。フランドル人画家ドメニコ・レムプスが人目をあざむくために描いた《だまし絵の静物画》（貴石細工研究所博物館）である。カンヴァスに信じられない精密さで描かれたこのキャビネットには、風景画や浮彫やカメオに混じって赤珊瑚、黒珊瑚、白珊瑚がある。頭骸骨もカブトムシも銃も凸面鏡もある。さらにはすでに紹介した《象牙製多面体》もある。まさに驚異の部屋の驚異のキャビネットである。扉に差し込まれた手紙の署名「フランチェスコ・リッカルディ侯爵」が本来の所有者を暗示しているのかどうかは不明である。確かなことは、ピッティ宮殿の大公子フェルディナンドの部屋の1713年の財産目録にこの作品が記載されていることである。

同じ1713年の財産目録にあるのが、水晶製《イルカ形塩壺》（銀器博物館）である。イルカの頭部に皿が乗り、尾鰭が鯨のように高々と跳ね上がった大胆な形である。

17世紀後半の貴石製容器を3点紹介しておきたい。2点はアウクスブルクの職人ヨハン・ダニエル・マイヤー作と推定されているものである。まず碧玉製《高坏》（銀器博物館）は、カラフルな3片の石を組み合わせ、海獣が抱きかかえる貝殻の形を表現している。このアシンメトリーの奇抜な形状は、かつてプラハでも活躍したミラノ人ガスパロ・ミゼローニが得意としたものをドイツ人工房で再現したものである。同じ作者が同時期に製作した血紅色碧玉または血滴石と呼ばれる石の《高坏》（銀器博物館）も、

どぎついほどにカラフルな3片の石を組み合わせているが、こちらは口縁に昆虫が1匹とまっている類例のない作品である。ともに花柄のエナメル装飾が美しい。

瑪瑙製《蓋付き高坏》（銀器博物館）には、器にアカンサスの葉模様、脚には螺旋状の彫りがほどこされている。蓋の上では「アン・ロンド・ボス」という技法でつくられたエナメル製のキューピッドが弓矢を手にくつろいでいる。

コジモ3世の治世を通じて大公直轄工房ではさまざまな素材を扱う専門の職人集団がすぐれた作品を生産しつづけていたが、やはり中心は貴石象嵌細工である。プリンチピ礼拝堂では常時40人もの職人が仕事に従事した。工房の作品は遠くインドのゴアまで運ばれることもあった。コジモ3世は、ゴアから聖フランシスコ・ザビエルの枕を贈られた返礼に、ザビエルの遺体を安置する祭壇をゴアに贈るため、1686年にジョヴァン・バッティスタ・フォッジーニに製作を依頼した。約7年の歳月をかけて完成した祭壇は、工房の2人の職人と一緒に船にゆられること1年、ようやく1697年に目的地ゴアに到着した。

職人のインド派遣はこれが最初ではない。すでに17世紀の初頭にフェルディナンド1世が石材を求めて職人をインドに送っていた。それからまたたく間に「フィレンツェ・モザイク」が普及した証拠に、ムガル帝国の首都デリーにあるレッド・フォートの玉座の間に貴石象嵌パネルがある。花や鳥の中心で竖琴を弾くオルフェウスが描かれている。音楽の普遍的な魔力で冥界をも魅了したオルフェウスは、異国への贈答品の主題にはうってつけである。

オルフェウス主題の作品を大公直轄工房は数多く製作しているが、そのうちの1点が《オルフェウスのいるキャビネット》（アメリカ合衆国、デトロイト美術館）である。中央のオルフェウスは竖琴ではなくリラ・ダ・ブラッチョかヴァイオリンを弾き、周囲の扉の18枚のパネルには象、駱駝、犀などエキゾチックな動物を含む18種の動物がいる。

神話主題のキャビネットには《神話場面のあるキャビネット》(パラッツォ・ヴェッキオ)がある。1691年の記録によれば、本来はポッジョ・インペリアーレのメディチ家の別荘にあった。黒檀に多色木材と真珠層の流麗な植物文様が象嵌されている。貴石象嵌パネルの神話の主題は、左上から反時計回りに「ガニュメデスの掠奪」「エウロペの掠奪」「ピュラモスとティスベの死」「アタランテとヒッポメネス」「泉を覗くナルキッソス」「ディアネイラの掠奪」「ペガソスとベレロフォン」、そして真ん中が「アドニス」の死である。

多くのキャビネットのなかでも、依然としてウフィツィの「トリブーナ」に君臨していたのは、フェルディナンド1世がブオンタレンティにつくらせた「ストゥディオーロ・グランデ」である。ミケランジェロの《聖家族》(ウフィツィ美術館)の真下に置かれたキャビネットの引出しには、多数のルビー、サファイア、トパーズ、エメラルド、オパールが収められていた。1709年にデンマーク王が来訪したとき、コジモ3世はみずからキャビネットに手を入れ、掌いっばいに彫玉を取り出して自慢げに見せびらかした。国王側は次のように記した。「誰でもここでは何かを言わずに素通りすることはできなかった。彼らは膨大な数の貴重な彫玉のほんの一部を披露しようと思っており、大公殿は緑色のビロードのクロスのかかったテーブルにそれらを並べた。ダイヤモンド、エメラルド、ルビーは大きさの順に3列に並べられたが、全部で200点以上はあった。縞瑪瑙、トパーズ、玉髄のコレクションはまったく信じられないほどであり、……いろいろな大きさのダイヤモンドは、複数のケースのあちらこちらに陳列されていた。大公殿はとりわけトパーズに精通していたので、いろいろなトパーズを蒐集しては、いちばん腕のいい職人に細工をさせていた。」当時、トリブーナには1300点の彫玉が天鵝絨を敷き詰めた32の整理棚に収納されていた。

コジモ3世は古代品を蒐集するだけでなく、同時代の彫玉師アンドレア・ボルゴニョーネ(ま

たはボルゴニョーニまたはベルゴニョーニともいうが、おそらくはフランスのブルゴーニュ地方の出身)やフィレンツェで生まれたその息子フランチェスコ・ガエタノ・マリア・ギンギ(1689-1762年)にも彫玉を注文した。ギンギ自身が書き記すには、コジモ3世の肖像1点、アンナ・マリア・ルイーザの肖像2点、彼女の夫プファルツ選帝侯ヨハン・ヴィルヘルムの肖像1点を製作している。ギンギは、最後のメディチ大公ジャン・ガストーネが死去した1737年、フィレンツェを去ってシャルル・ド・ブルボンの治めるナポリ宮廷に赴くことになるが、「貴石細工の技術をもつ名匠がいなくなったので、この分野は著しく衰退した」と回想している。しかし、じつは彼のライバルだったガエタノ・トリッチェリ(1757年フィレンツェ没)などの名匠がいて、赤縞瑪瑙製《クレオパトラ》(銀器博物館)や黄縞瑪瑙製《ミネルヴァ》(銀器博物館)、そして瑪瑙製《盾をもつピュロス》(銀器博物館)を製作していた。

貴石象嵌細工の到達した頂点のひとつは、《植物装飾と動物装飾のあるテーブル》(パティエーナ美術館)である。これはジョヴァン・パッティスタ・フォッジーニが描いた素描の1点に基づいて、1716年に製作されたテーブル天板の傑作である。果物や動物や鳥の写実はりゴツツイ風の自然主義的要素を残しているが、そうした要素を圧倒してしまうほどの曲線の過剰な植物模様が全体を支配している。とりわけ幻想的なのが四隅に描かれた百合の王冠をかぶるイルカの、泡立つような、鱗のような、植物のような、有機的な曲線の過剰な装飾である。自然と幻想、直線と曲線、黒と色彩、すべてが本作に密集している。白い葡萄なども石の濃淡を利用して立体的に見える。形容しようのない、溜め息のでる、目のくらみそうな傑作である。

17世紀の貴石彫刻の特徴のひとつは、硬質の石材であたかも蠟細工のような柔らかさを表現することだった。当時人気のあった蠟細工師ガエタノ・ズンボ(1656-1701年)は、シラクサに

Oct. 2016

バロック期におけるメディチ家の宝物コレクション

生まれてナポリ宮廷からコジモ3世のフィレンツェ宮廷、さらにルイ14世のパリ宮廷と渡り歩いてパリに没する人物である。フィレンツェには《ベスト》《時の凱旋》《屍の腐爛》(ラ・スペーコラ動物学博物館)などの作品を残し、フィレンツェで7000人以上の人命を奪った1630-33年の恐ろしいペストの記憶をよみがえらせた。その蠟細工師ズンボのもとで修行したのが、当時最高の貴石彫刻家ジュゼッペ・アントニオ・トリチェッリ(1659-1719年)。前述のガエタノ・トリチェッリの父である。そのジュゼッペ・アントニオ・トリチェッリの作品が、盾形の玉髄製カメオ《コジモ3世とトスカーナ》(貴石細工研究所博物館)である。右側にコジモ3世、左側に大公冠をかぶる「トスカーナ」の寓意像、2人の足許にライオン、背景には「平和」の神殿。構図は1684年にマッシミリアーノ・ソデリーニ・ベンツィがつくったブロンズ製メダルに基づいているが、本作は淡いピンク色と灰色の混ざった、なめらかな、官能的なあつらえである。

《大公妃ヴィットリア・デッラ・ローヴェレの胸像》(銀器博物館)もジュゼッペ・アントニオ・トリチェッリの作である。コジモ3世の母の死から3年後の1697年の記録には、「すでに頭部はできあがり、胸部を製作中」とある。だがこれは72歳の肖像ではなく、若い盛りの、ということは息子コジモ3世にとっては思慕の対象としての母の等身大の胸像である。顔はヴォルテッラ産の肌色の玉髄、眉毛はエジプト産の黒いカイヨ石、唇は黄碧玉、髪は木材の化石、肌着はヴォルテッラ産の白碧玉、服とヴェールはフランドル産の黒大理石。まるで絵の具で彩色したように石の色を組み合わせている。信心深い彼女が支援したモンタルヴェ女子修道院の黒衣を身につけている。

やはりジュゼッペ・アントニオ・トリチェッリが貴石彫刻、コジモ・メルリーニが金細工を担当した《幼児イエスのいるゆりかごの聖遺物容器》(銀器博物館)でも、透明な水晶製のゆりかご(これが聖遺物容器)の上の白い布と幼児に玉髄を使用しながら、ぷよぷよとした柔らか

い触感をだすことに成功している。

コジモ3世の愛娘アンナ・マリア・ルイーザは結婚してデュッセルドルフで暮らしたため、コジモ3世は数々の贈り物をデュッセルドルフに向けて発送している。なかでも次の大小2点は、1694年から1725年まで宮廷首席彫刻家兼建築家をつとめた前述のジョヴァン・バッティスタ・フォッジーニが企画したばかりかブロンズ・モデルまで手がけた作品であり、特筆に値する。1点目はジュゼッペ・アントニオ・トリチェッリとアダモ・ジェスターの共作《3人のケルビムのいる祈祷台》(ピッティ宮殿のアッパルタメンティ・レアーリ)である。黒檀製の台座にヴォルテッラ産の玉髄で3人のケルビムが彫られている。カラフルな碧玉製の果物がたわわに実る装飾芸術の傑作である。

もう1点は、祝祭的な豪華さを誇る《プファルツ選帝侯のキャビネット》(銀器博物館)である。黒檀にモミ、ポプラ、クルミ、真珠層を組み合わせ、貴石象嵌のパネルと浮彫で装飾されている。キャビネット最上部には両家の紋章とともに「雅量」と「剛毅」を示す女性寓意像。中央の壁龕には、貴石と鍍金ブロンズ製のプファルツ選帝侯ヨハン・ヴィルヘルムが「エロイカ風」に武装して戦利品にすわる堂々たる座像。アンナ・マリア・ルイーザはこれをフィレンツェに持ち帰ってピッティ宮殿で晩年を過ごすことになるが、現在、この《プファルツ選帝侯のキャビネット》が東壁に設置された「謁見の間」第3室(銀器博物館)の内装は往時をしのばせるものである。

コジモ3世は帰郷した愛娘アンナ・マリア・ルイーザを慰めるために、ジョヴァン・バッティスタ・フォッジーニに1722年から1724年にかけて12点連作の小ブロンズ像を製作させた。そのうちの1点が《キリストの洗礼》(パラティーナ美術館)である。高さ45センチの小品にバロック的な壮大さを感じさせる。マニエリスムの彫刻家ジャンボローニャと同様、バロックの彫刻家フォッジーニも、アクロバティックな妙技を披露してパトロンを楽しませる多芸多

オの名匠だった。

ピッティ宮殿にあった贅沢な家具調度の多くは早晩湮滅する運命にあり、貴石象嵌をほどこした多数の天蓋付きベッドなども現在、破片をのぞき1台も存在しない。なかでも真っ先に失われたのが銀製品で、ほとんどはロートリンゲン家時代やナポレオン時代の略奪によって鋳潰された。たとえば大公子フェルディナンドが所有していた銀製鳥籠などの贅沢品が略奪の犠牲になった。ところが世俗的な銀製品がこうむった破壊行為を宗教的な銀製品が免れた例がある。

前述のマッシミリアーノ・ソルダーニ・ベンツィは当時のもっともすぐれた彫刻職人のひとりで、1682年にパリに派遣された際には、ルイ14世を感激させてモデルのポーズをとらせたほどである。フィレンツェに帰国するとメディチ家を称揚するメダルやコインを量産した。1694年から大公直轄工房の最高責任者になったフォッジーニが異なる素材を贅沢に組み合わせたのに対して、ベンツィはもっぱら貴金属の加工に精力を傾けた。金と銀の素材の特性をいかんなく発揮した彼の最高傑作が《聖カジミエシュの聖遺物容器》(サン・ロレンツォ聖堂)である。にぶい光を放つ銀とところどころに配された金の輝きが絶妙である。金のまさる下半分は天使にからみつく葉をモチーフにした螺旋状の装飾、銀のまさる上半分は天使が抱きかかえる生命力にあふれる百合の花の装飾。天使をめだたない銀にしたところが心にくい。ベンツィが偉大な彫刻家というだけでなく、現代にも通じるすぐれたセンスをもつデザイナーだったことを実証する作品である。

コジモ3世はインブルネータのサンタ・マリア聖堂の祭壇と天蓋を注文し、ジョヴァン・バッティスタ・フォッジーニ、ベルンハルト・ホルツマン、コジモ・メルリーニが1698年から6年の歳月をかけて製作した。1714年に完成した銀製の《祭壇前部装飾》(インブルネータ、サンタ・マリア聖堂)が残っている。中央円形には、祖父の《神に感謝を捧げるコジモ2世》を

明らかに模倣した構図で、コジモ3世がひざまずく姿で表現されている。《祭壇前部装飾》は病床にある大公子フェルディナンドの快癒を祈念して聖母マリアに奉納した作品であるが、不吉な予兆などまったく感じさせない、権力の永続性を誇る作品に仕上がっている。しかし大公子フェルディナンドは作品ができる前年に50歳で不帰の客となった。コジモ3世がいちばん期待をかけていた「トスカーナの偉大なる光明」が早々と消えてしまったのだ。

VI コジモ3世の聖遺物容器

長男が他界したとき、コジモ3世は71歳。晩年には禁欲的な妄信に凝り固まり、他の宗教に非寛容になった。孫がいないため、家系断絶が必定となったのだから、沈鬱にならざるをえない。コジモ3世は歴代大公のうちで最長の81歳まで憂愁に満ちた長すぎる晩年を過ごさねばならなかった。彫玉師フランチェスコ・マリア・ガエタノ・ギンギが製作した玉髄製カメオ《コジモ3世の肖像》(銀器博物館)でも、即位時の澁澁とした面影は消え、老残の苦渋が隠せない。外貌が痛々しく崩れ、魂だけが天国を志向する。

聖遺物容器のほとんどが1690年から1715年のあいだに製作された。私的な信仰心の高揚と大公直轄工房の爛熟があいまったバロック様式の見応えある作品ばかりであるが、これらは公開展示を目的とした作品ではないので、かえって大公の心の闇に触れる造形といえよう。

1690年、マッシミリアーノ・ソルダーニ・ベンツィが製作した《聖ライムンドゥスの聖遺物容器》(サン・ロレンツォ聖堂)から、黒檀製のアーチ状壁龕に聖人と天使が表現される祭壇形式の聖遺物容器の連作がはじまる。

《トゥールーズの聖ルイの聖遺物容器》(サン・ロレンツォ聖堂)。ナポリ王シャルル・ダンジューの次男トゥールーズの聖ルイは、かつてドナテッロも彫像をつくったことがあるほど、フィレンツェでは人気の高い聖人である。王家

Oct. 2016

バロック期におけるメディチ家の宝物コレクション

に生まれながら宗教の道に入った高潔さがコジモ3世の心をとらえたのだろう。右下の王冠と左の司教杖が聖人の立場を示している。

《聖アレクシウスの聖遺物容器》(サン・ロレンツォ聖堂)。ローマ貴族の聖アレクシウス(5世紀)は、婚礼前夜に裕福な花嫁を残して出奔し、物乞いに身をやつして貧民救済に生涯を捧げた。この伝説に後日談がついて、ローマに戻ったあとも、正体を知られることなく、父の家の下僕として階段の下で暮らしたという。ここでは階段の下の片隅で息絶える場面である。マッシミリアーノ・ソルダーニ・ベンツィの一連の聖遺物容器のなかで、もっとも芝居がかった劇場的な傑作である。もしかしたらステファノ・ランディ作曲のオペラ『聖アレッシオ』(1632年初演)の影響を受けているのかもしれない。死後に正体が顕われるというテーマは古今東西の演劇で愛された普遍的なテーマである。

ジョヴァン・バッティスタ・フォッジーニが下絵を準備し、ジュゼッペ・アントニオ・トリチェッリが貴石彫刻、コジモ・メルリーニが金細工を担当して、1704年に完成した《エジプトの聖マリアの聖遺物容器》(サン・ロレンツォ聖堂)は、また別のタイプになる。この3人の共作で10年間ほど同じタイプの聖遺物容器が複数つくられた。バロックの過剰な装飾趣味はここにきわまる、といった感がある。エジプトの聖マリア(5世紀)は、アレクサンドリアで娼婦だったが、エルサレムで回心し、荒れ野で懺悔の隠遁生活を送った。といえ、有名なマグダラのマリアを連想させるが、逆にマグダラのマリアのほうがこちらのマリアと混同されて伝説に尾鰭がついたのだ。痩せさらばえたマリアの姿と聖遺物を捧持する黄金の天使の堂々たる姿。そのコントラストが地上界と天上界の価値の逆転を劇的に示している。

大公直轄工房が製作した《聖シギスムンドゥスの聖遺物容器》(サン・ロレンツォ聖堂)は、これまた別のタイプになる。ジョヴァン・バッティスタ・フォッジーニがデザインしただけでなく、ダイナミックな銀製の人物群像の鑄造に

も直接関わったはずである。バラティーナ礼拝堂のために1719年に完成した作品である。銀で統一された人物群像とごくわずかに使われた貴石の配色にセンスのよさを感じさせる。

それにしても伝説的な世界に属する5世紀のエジプトの聖マリアの聖遺物が本当にあるのだろうか、と疑いをはさむのは現代人の合理的な発想であって、幼児キリストの縄がある時代のことだから何があっても不思議ではない。聖遺物の存在を信じていたことは、疑いないことである。

VII メディチ家最後の大公ジャン・ガストーネ

コジモ3世が失意のうちに世を去ったとき、4歳で母と離別したジャン・ガストーネ(メディチ家らしからぬ名は母方の祖父で、フランス王ルイ13世の弟ガストン・ドルレアンにちなむ)はすでに52歳になっていた。兄フェルディナンドはすでになく、姉アン・マリア・ルイーザはピッティ宮殿に戻っていた。

ジャン・ガストーネは、1697年、26歳のときザクセン＝ラウエンブルク公女アンナ・マリア・フランツィスカと結婚してプラハ近郊のライヒシュタットに暮らしたが、そんな田舎暮らしに耐えられるはずもなく、37歳のときに妻を残してフィレンツェに戻ると、酒色と男色にふける怠惰な放蕩生活を送った。自分を無能視し、頑迷固陋に老いていく父への復讐であるかのように、父のいちばん望むこと、すなわち継嗣をつくることを拒否した。

彼は何ひとついいことをしなかった、で終れば話は簡単だが、そこは腐ってもメディチ家。古代品蒐集家だった大修道院長ピエトロ・アンドレア・アンドレーニの遺品から1731年、約300点の彫玉をごっそりと購入した。それ以前から所有していたアンドレーニの旧蔵品にも、オネスタ銘のある紅玉髓製インタリオ《ヘラクレスの頭部》(考古学博物館)やプロタルコス銘のある玉髓製カメオ《ライオンに乗るエロ

ス》(考古学博物館)など古代の名品が含まれていた。《ライオンに乗るエロス》については、大修道院長アンドレイニが生前に大公に贈与したものだとか、いや盗まれて大公に転売されたものだとか、同時代の史料にも異なる証言が残っている。

同じ1731年、ジャン・ガストーネは彫玉師カルロ・コスタンツィ(1705-81年)がつくった彫玉を23点購入。コスタンツィは古代品を模倣する専門家だったが、現在フィレンツェで確認されるのはサファイア製の《フィリッポ・ストッシュ男爵の肖像》とトパーズ製の《教皇ベネディクトゥス13世の肖像》(ともに銀器博物館)の2点だけである。1732年から1735年までフィレンツェに滞在した同時代の彫玉師ロレンツォ・ナッターの作品も《ポンペイウス・シクストゥスの頭部》と《男の肖像》(ともに銀器博物館)の2点が現存している。

ジャン・ガストーネの生前からイギリス、フランス、スペイン、オランダ、オーストリアなどの列強諸国が大公位を虎視眈々とねらっていた。列強諸国に死を待たれる気の毒な身のジャン・ガストーネであったが、死の床でひとつだけいいことをした。大公国がどの国にも併合されないという約束をとりつけ、1737年7月9日、66年の倦怠に満ちた生涯を閉じた。ピッティ宮殿にはひとりアンナ・マリア・ルイーザが残された。

VIII メディチ家最後の相続人アンナ・マリア・ルイーザの宝飾品

アンナ・マリア・ルイーザはコジモ3世の第2子として1667年8月11日に生まれた。母がフランスに帰国したとき、8歳にも満たなかったため、祖母ヴィットリア・デッラ・ローヴェレに養育された。幼少時から宝飾品を好んだことが何点もの肖像画からわかる。

1691年4月29日、フィレンツェの大聖堂で(慣例どおり新郎不在のまま)結婚式をあげた。相手はドイツでも指折りの有力者(皇帝レオポ

ルト1世、ポルトガル王ペドロ2世、スペイン王カルロス2世の義兄弟でもある)プファルツ選帝侯ヨハン・ヴィルヘルムである。同年5月6日、デュッセルドルフへの出発に際し、コジモ3世は愛娘にたくさんの宝物を持たせた。2度妊娠し、2度流産した。夫から梅毒をうつされ、子どもが産めない身体になった。1716年、夫は死去した。しかし25年間の結婚生活は必ずしも不幸とはいえない。夫は国外旅行のたびに土産物を持ち帰り、宮廷祝典のたびに妻に贈り物をしたのだ。1717年、父の待つフィレンツェに帰着した50歳の寡婦は、ドイツからたくさんの美術工芸品や宝飾品を持ち帰った。

なかには帰郷がかなわなかった彼女の所持品もある。豪華な《時計》(ロンドン、ギルバート・コレクション)もそのひとつである。瑪瑙製の2本の円柱にはさまれた中央パネルには、黒大理石を背景にグロテスク人面やアカンサスの渦形装飾、そしてラピスラズリ製のヒルガオなどの可憐な花々がちりばめられている。文字盤もラピスラズリ製。両サイドには鍍金ブロンズの花飾りに貴石製の果物がぶらさがっている。時計の内部に埋め込まれた細い金糸の飾り文字「AMEP」のアナグラムは「プファルツ選帝侯妃アンナ・マリア」を示しており、コジモ3世が愛娘に贈った品であることがわかる。時計の下部に、19世紀にキャビネットが追加されて「キャビネット時計」になったが、キャビネットの中央には1700年頃にフィレンツェで製作されたチューリップ、カーネーション、キンボウゲなどの写実的な花模様の貴石象嵌パネルが用いられている。時代を超えた組み合わせだが、違和感なく全体が見事に調和した好例である。

現在、銀器博物館に所蔵されている宝飾品は、彼女が持ち帰った品のほんの一部にすぎないが、それらをざっと見渡すだけでも製作年代は16世紀から18世紀までの幅がある。コレクションの最後の彫玉として1対のカメオを紹介しておきたい。ドイツでつくられた《アンナ・マリア・ルイーザの肖像》と《プファルツ選帝侯ヨハン・ヴィルヘルムの肖像》(銀器博物館)

Oct. 2016

バロック期におけるメディチ家の宝物コレクション

である。赤縞瑪瑙の背景に、真珠のついたエナメル製の冠をいただく白い縞瑪瑙のプロフィールが浮かび上がっている。

1743年2月18日、75歳数カ月のアンナ・マリア・ルイーザは豪華な家具調度に囲まれながらピッティ宮殿で息を引き取った。ウィーンにいる大公フランツ・シュテファンの代理をつとめる摂政政治の指導者の1人リシュケール伯が、1743年5月27日に彼女の財産目録の編纂を完成させ、遺産総額を427万8574スクードと評価した。この財産目録は2部構成で、とくに第2部が「至福の宝飾品」と名付けられた789項目（1項目に複数の品を含む）の宝飾品を記載している（上記の夫婦のカメオを含む）。以下、それらを紹介してみたい。

輿入れと帰郷の長旅をともにした作品に、バロック真珠と宝石細工を組み合わせた魅力的な動物シリーズがある。

バロック真珠の歪みを逆手にとって動物に見立て、別の宝石と組み合わせる遊び心から優品がうみだされた。アンナ・マリア・ルイーザの所持品だが、多くは16世紀後半の大公フェルディナンド1世が枢機卿だった時代に仕えたフランドル人レオナルト・ザーレースの作品と推測されている。フェルディナンド枢機卿の財産目録にたびたび作者名と作品名が登場するからである。

フェルディナンド1世は1584年、姪のエレオノーラ（1567-1611年）をマントヴァ公爵ヴィンチェンツォ・ゴンザーガに嫁がせた際に「蜥蜴1点」「蛙2点」「蝶（実際はトンボ）2点」「蜘蛛2点」「ドラゴン1点」などを贈っているが、エレオノーラの逝去とともにフィレンツェに返還された可能性が高い。

《雄牛》（銀器博物館）は、エレオノーラ・ゴンザーガが所有していた宝石箱のなかにあった品に似ており、宝石箱も宝石も、フェルディナンド枢機卿の注文でフランドル人金細工師レオナルト・ザーレースがローマでつくったと考えられる。この作品が製作者と制作年代の決め手になった。

《蜥蜴》（銀器博物館）は、背中に細長く薄いバロック真珠が使われ、4本脚と頭と尾に14個のダイヤモンドが嵌め込まれている。《トンボ》（銀器博物館）は、トンボの胴体に長いバロック真珠が使われている。

その他の動物には《駝鳥》《孔雀》《コウノトリ》《梟》《鳩》《亀》《猿》《羊》《犬》《ネズミ》《蜘蛛》《蛙》などがあり、まるでミニチュア動物園の様相を呈している。このミニチュア動物園には、高さ2.9センチのひょうきんな《ドラゴン》までいる。異郷に嫁いだ花嫁の孤独を慰める愉快的仲間たちだが、他愛のない小品に最高の贅がこらされている。

17世紀末に登場するバロック真珠の人物シリーズには次のものがある。ターバンを巻き短いスカートをはく黒人商人がエキゾチックな《駱駝》や《象》（ともに銀器博物館）を引き連れた異色品である。《象》の背にのる塔形の輿には12個のダイヤモンド、エメラルド製の台座には25個のダイヤモンド、合計37個のダイヤモンド。遊び心にも程があるというものだ。

バロック真珠を利用した人物像は、真珠の形が形だけにどこか滑稽さをただよわせる。17世紀末にドイツの宮廷工房で製作された《スイス人兵士》と《靴職人》（ともに銀器博物館）は、同形の台座に立つ。より豪華な台座（24個のダイヤモンドと32個のルビー）に立つ《スイス人兵士》はユーモラスな侏儒、《靴職人》はシリアスな子どもでもある。子どもながらに立派な服を着て帽子をかぶり、三脚椅子に座しているところを見ると、宮廷お抱えの靴の修繕屋であろう。

《バッコス》（銀器博物館）は置物として優れているので、小型キャビネットかテーブルか棚の上に飾られていたはずである。円形に組まれた葡萄の樹枝のなかで、酒神バッコスは葡萄酒を飲んでしたたか酩酊している。左下の林檎を口にする猿は人間の墮落の象徴であるが、飲酒＝墮落という教訓も付け足しのように見え、墮落もまた楽しい、といわんばかりである。

《ゆりかごの赤ん坊》（銀器博物館）は、1695年に、宝石職人アンドレ・ヨセフ・ファン・デア・

クライセが選帝侯宛の手紙で作品ができしだい発送すると約束しているので、製作年代が限定できる作品である。金線の組紐が豪華なゆりかごのなかで赤ん坊が眠っている。ゆりかごの4つの把手は真珠、日よけも半円形の真珠、ふわふわの肌掛けも真珠。赤ん坊の頭部も真珠。めでたい真珠づくしである。裏面に金糸で記された「かくあれかし」のラテン語の文字は後継者の誕生を暗示しているが、それはかなわぬ夢に終わった。

バロック真珠を使ったペンダントも多い。《鸚鵡のペンダント》(銀器博物館)は、金とエナメル製のカラフルな鸚鵡が小枝にとまって苺をついばんでいる。

《蜜蜂に刺されたドラゴンのペンダント》(銀器博物館)は、ドラゴンの体がバロック真珠。ドラゴンは左翼のかぎ爪で必死の抵抗を試みるが、蜜蜂に刺された痛みには耐えかねて目と口を大きく開け、白い歯と赤い舌をみせる間拔けな姿である。蜜蜂のシンボリズムは「良き統治」であり、1588年にミケーレ・マッツァフィッリがフェルディナンド1世のためにつくった金製メダル《フェルディナンド1世の肖像》(バルジェッロ国立博物館)の裏面にも大公冠を戴く女王蜂のまわりに働き蜂が群がり、君主の美徳を表す「ただ尊厳によりて」というインプレザが刻まれている。サンティッシマ・アヌンツィアータ広場に立つ《フェルディナンド1世騎馬像》の台座にもついているこのインプレザは、フェルディナンド1世が大公に即位した1588年にシピオーネ・バルガーリが大公個人のために選んだものである。

16世紀末の金細工師のあいだで人気の高い主題は人魚である。男の人魚はトリトン、女の人魚はセイレンと区別される。本来、神話のセイレンはハルピュイアに似て鳥の姿をした女であるが、美声で船乗りを惑わしたことから人魚のイメージが派生したのだろう。フィレンツェにあるセイレンのペンダント3点のうちでもっとも重要なのは、バロック真珠が胸部に使われた《セイレンのペンダント》(銀器博物館)であ

る。セイレンは幸運の女神フォルトゥーナのように王冠をかぶり、両手には太陽のついた笏と砂時計を持つ。太陽の裏面は濃紺の夜景に浮かぶ三日月であり、潮の満干と同様に好運と不運が表裏一体の関係にあることを示している。砂時計は時が容赦なく過ぎ去る儚さの象徴であり、大きく湾曲する華美な尾鰭は刹那的な快楽の象徴であろう。

《セイレンのペンダント》と一対と思われる《トリトンのペンダント》(銀器博物館)も、バロック真珠が胴体に使われている。こちらはヘルメットをかぶり、両手には棍棒と盾(大粒の柘榴石)をもって臨戦体勢にある。

神話主題のペンダントは人気があり、《ヴィーナスとマルスのペンダント》《ヒッポカンボス(半馬半魚の海馬)に乗るクビドのペンダント》《キマイラと戦うペルセウスのペンダント》など枚挙にいとまがない。

職人が国境を越えて移動したことは、大公直轄工房にフランドル人やフランス人、スウェーデン人までいたことからわかるが、逆方向つまり南から北への移動もこれに劣らず多かった。ナポリ出身の宝飾職人ジョヴァン・パッティスタ・スコラーリがつくった《ゴンドラのペンダント》(銀器博物館)には興味深いエピソードがある。ゴンドラの上にいるのはコンメディア・デッラルテの登場人物たちで、左の赤服が金持ちのパンタローネ、右の白服が召使いのザンニ。楽器を手に2人が恋人たちにセレナーデを歌っている。この作品は1568年にコンメディア・デッラルテがアルプス以北で初めて上演された記念にミュンヘンで製作された。上演の主催者は、皇帝フェルディナント1世の娘アンナと結婚していたバイエルン公アルブレヒト5世。息子のヴィルヘルム(1548-1626年)がロートリンゲン(ロレーヌ)公フランツ1世の娘レナータ(彼女の従妹クリスティーヌがトスカーナ大公フェルディナンド1世妃)と結婚したときの催し物のひとつであった。ペンダントは芝居の一場面なのだ。ところがおもしろいことに、職人ジョヴァン・パッティスタ・スコラー

Oct. 2016

バロック期におけるメディチ家の宝物コレクション

りは別の機会にはザンニを演じた役者でもあって、彼が立つ舞台上別の役者が惨殺されたことがあった。旅芸人は小道具もつくらねばならないから手先の器用な職人であっても不思議はない。

もっとも奇抜なペンダントは《ホイッスルに乗る猿》(銀器博物館)である。真珠が4個、ダイヤモンドが3個、エメラルドが5個、ルビーが24個使用されている。緑の服を着た猿は杖をつく行商人の恰好をし、果物のつまった荷籠を背負っている。虚栄の戒めが豪華な宝飾品というところが、逆説的な諧謔になっている。「猿知恵」のパロディーはとりわけネーデルラント地方で流布しており、1691年のデュッセルドルフの財産目録によれば、この図像もアントウェルペンで出版された銅版画に基づいている。このペンダントでいちばん奇抜なのは、「豊饒の角」の形をしたホイッスルが実際に鳴ることであり、子ども用に製作された可能性が指摘されている。

17世紀末に製作された一連の象牙彫刻は、エナメルや宝石と組み合わせたとくに特徴があり、アクロバティックな形状と違って、むしろ古典的と形容したい作風である。蒐集したアンナ・マリア・ルイーザの美的センスを感じさせる作品群である。

《男性巡礼者》(銀器博物館)は、ホタテ貝を飾った肩掛けをまとい、右手に巡礼杖をもち、腰帯には財布と水筒をぶらさげている。対をなす《女性巡礼者》(銀器博物館)が腰帯にぶらさげているのは、財布と水筒と20個のダイヤモンド製口ザリオ。靴と肩掛けの釦もダイヤモンド。《男性巡礼者》の台座には「このように我が道を行け」、《女性巡礼者》の台座には「初めから終わりまで」とフランス語の文字が黒いエナメルで書かれている。人生の旅路をともに歩む夫婦の姿であるが、清貧とはほど遠い。

同じく男女一対の行商人像は、さらに手が込み、さらに魅力的な立ち姿である。《男性行商人》(銀器博物館)は背負う荷物の重さで前屈みになっているが、荷物のなかの商品は化粧品、

医療器具、眼鏡、3本の薬瓶などである。一方、《女性行商人》(銀器博物館)は、頭上に果物や花を満載した枝網籠を載せて運ぶ「豊饒の女神」の古典的な風情。これらは、アンニバレ・カラッチの『ボローニャの芸術』(1646年)やジョヴァンニ・マリア・ミテッリの『路上の芸術』(1660年)といった銅版画集から着想を得たものである。

その他、《刃物の研ぎ師》や《ラバ追い》(ともに銀器博物館)などがあるが、後者の異国風ラバ追いが牽くラバの背には猿の王が乗り、荷物は香水瓶の容器になっている。前者には55個のダイヤモンド、後者には24個のダイヤモンドが使用されている。

これら象牙製の彫刻群が表す各種の職業は、いったいなんなのか? じつは城主が宿の主人に扮し、招待客が宿泊客に扮する、宮廷における宴会の余興を表したものののだ。宮廷人は庶民に身をやつすことで、日頃の厳格な宮廷作法を忘れ、下層身分にだけ許される自由を満喫する。宴会の終わりには、招待客は高価な「手土産」を贈られるのだが、宴会での身分にあわせて、庭園に仮設された売店でそれらを買うふりをしたという。買い物ごっこである。一例をあげれば、のちにプロイセン王フリードリヒ1世となるブランデンブルク選帝侯フリードリヒ3世とその妃ゾフィー・シャルロッテ(2人の子が有名な「兵隊王」フリードリヒ・ヴィルヘルム1世)が、1690年1月9日、ベルリンの宮廷で「研ぎ屋の宴会」を催した。ゾフィー・シャルロッテは哲学者ライプニッツと親交があるほど、宮廷には知的な雰囲気満ちていた。宴会の進行役をつとめた詩人ヨハン・フォン・ベッサーは、「研ぎ屋」をわざわざ偽者だことわり、天下国家の大問題を憂慮する必要のない自由気ままな庶民であると、ことさらに強調している。

Ⅹ アンナ・マリア・ルイーザの宝飾品 後日譚

アンナ・マリア・ルイーザの遺品のなかで、特殊な形状のために正確な来歴を財産目録でたどることのできる例外的な作品がある。1580年代の図案に基づく9点セットの《兵士像のあるブローチ》(銀器博物館)である。ブローチはプファルツ選帝侯フリードリヒ4世が1599年に購入し、当初は帽子の黒いビロードのリボンに縫い付けられていた。その後、1691年のプファルツ選帝侯ヨハン・ヴィルヘルムの財産目録に記載があり、目録の余白に妃アンナ・マリア・ルイーザに譲渡された旨が記されている。1743年のフィレンツェの財産目録に記載があるが、1768年にはウィーンの財産目録に再度記載がある。どうしてウィーンに戻り、また、どうしてフィレンツェに戻ったのか？ アンナ・マリア・ルイーザの遺品を追いかけてみる必要がある。

弟ジャン・ガストーネの死からわずか3か月後の1737年10月31日、70歳のアンナ・マリア・ルイーザと29歳の新大公フランツ・シュテファン双方の代理人がウィーンで「家族協定」に署名した。彼女がこだわったのは、メディチ家の家財道具や絵画、彫刻、書物、宝物などを大公位継承者に譲渡するが、「首都および大公国の領地から何ひとつ持ち出してはならない」という条件を付した第3項だった。

だが執拗に宝物をねらうフランツ・シュテファンは条項を有利に解釈しようとしたので樂觀はできない。1739年1月20日から4月27日までマリア・テレジアを伴ってフィレンツェに滞在した際、これが唯一の滞在だったが、公式行事でメディチ家の宝冠や宝飾品を身につけた。しかし出立時には、アンナ・マリア・ルイーザの鋭い眼光に睨まれて持ち去りを断念した。

気が気でないアンナ・マリア・ルイーザは1739年4月5日、国有化を再主張したが、フランツ・シュテファン側も1741年1月14日、「家族協定」を無視して宝物の引き渡しを要求した。

アンナ・マリア・ルイーザはこれも断固拒否し、1741年3月10日に財産目録を作成して宝物を再確認した。両者の攻防は終らなかったのだ。

アンナ・マリア・ルイーザの没後、1743年5月27日にリシュケール伯が財産目録を編纂したことは前述した。その第2部「至福の宝飾品」789項目の末尾の余白に「残留」「分解」「売却」などの文字が書き足されている。いちばん多いのは、簡単に「ウィーンへ」と書かれたものである。おびただしい数が一度ウィーンへ行ったのだ。

フランツ・シュテファンの死後作成されたウィーンの財産目録には、現在フィレンツェにある「至福の宝飾品」のほとんどすべて(ただし《靴職人》《蜘蛛》《ドラゴン》《ゆりかごの赤ん坊》《鳩》《ライオン》の6点を除く)が記載されている。もちろん前記の《兵士像のあるブローチ》は含まれていた。

フランツ・シュテファン＝皇帝フランツ1世から数えて8代目の皇帝カール1世(在位：1916-18年)が第一次世界大戦末期に退位したことでハプスブルク＝ロートリンゲン家の支配するオーストリア＝ハンガリー帝国は瓦解した。1919年9月10日のサン・ジェルマン条約締結に続き、1920年5月4日、イタリアはオーストリアとのあいだに芸術品に関する特別協定を結んだ。

1920年代にフィレンツェとウィーンの財産目録を比較照合することで、不正に持ち出された芸術品をイタリアに返還させることができた。協議に参加したイタリア代表団の1人はブレラ絵画館館長だったエットーレ・モディリアアーニ(1873-1947年)である。だがメディチ家の宝物奪還にもっとも貢献したのは、それよりさかのぼること2世紀の昔、コレクション散逸の悲運を見越して「家族協定」を固守したアンナ・マリア・ルイーザの先見の明にはほかならなかったというわけである。

Oct. 2016

バロック期におけるメディチ家の宝物コレクション

主要参考文献

- AA. VV., *Il Museo degli Argenti: Collezioni e collezionisti*, Firenze, 2004.
- AA. VV., *Le gemme dei Medici al Museo degli Argenti*, Firenze, 2007.
- AA. VV., *Il Tesoro dei Medici al Museo degli Argenti*, Firenze, 2009.
- AA. VV., *Nel segno dei Medici: Tesori sacri della devozione granducale*, Firenze, 2015.
- Gisuti, A. (a cura di), *Splendori di Pietre Dure: L'Arte di Corte nella Firenze dei Granduchi*, Firenze, 1989.
- Giusti, A., *L'arte delle pietre dure da Firenze all'Europa*, Firenze, 2005.
- Giusti, A., *Museum of the Opificio delle Pietre Dure*, Livorno, 2007.
- Giusti, A., *La Fabbrica delle Meraviglie: La manifattura di Pietre Dure a Firenze*, Firenze, 2015.
- Hackenbroch, Y., Sframeli, M., *I gioielli dell'Elettrice Palatina al Museo degli Argenti*, Firenze, 1988.
- Luchinat, C. A. (a cura di), *Tesori dalle Collezioni medicee*, Firenze, 1997.
- Massinelli, A. M., Tuena, F., *Il Tesoro dei Medici*, Firenze, 2000.
- Mosco, M. (ed.), *Meraviglie: Precious, Rare and Curious Objects from the Medici Treasure*, Firenze, 2003.
- Sframeli, M. (a cura di), *I gioielli dei Medici: dal vero e in ritratto*, Livorno, 2003.
- Spinelli, R. (a cura di), *Il Gran Principe Ferdinando De' Medici (1663-1713): Collezionista e mecenate*, Firenze, 2013.
- Timothy, M., *Il Nuovo Museo dell'Opera del Duomo*, Firenze, 2015.
- Tuena, F. M., *Il Tesoro dei Medici: Collezionismo a Firenze dal Quattrocento al Seicento*, Firenze, 1987.

(2016年7月15日掲載決定)